

認め愛, 助け愛, 期待をかけ愛, 高め愛！

新年令和4年がスタートしました。本年もよろしくお願いいたします。

「エビデンス」。コロナ禍の世の中になってよく耳にすることになった言葉です。簡単に言うと「根拠」「証拠」といった意味で使われる言葉ですが、医療業界で、「症例に対して効果があることを示す根拠・証拠」という形で使われていたものが、コロナの影響であったという間に市民権をもつようになりました。

私たち教職員も、1月6日に学校評価会議を実施しましたが、そのベースとなった数値データは一種のエビデンスとも言えます。当校の学校評価等のアンケートは、いわゆる4件法という手法、つまり肯定的評価が2段階、否定的評価が2段階設定の中から回答を選択する形をとっています。これが集計されて数値化されるわけですから、その段階ではいわゆる定量的評価であるとは言えますが、その元になる個々の評価は、根拠となる判断材料が明確にある場合は別として、往々にして感覚的な判断をする場合も多いのではないのでしょうか。しかし、こういった感覚的な評価がいい加減かと言えば、決してそうではなく、学校現場で大事にしたいのも、まさにこういった肌感覚なのです。

例えば、朝や帰りの会や授業の開始時に、教室に足を踏み入れた瞬間、「あれ、やたら教室の空気が重いなあ」「何かクラスでトラブルがあったのかなあ」などと感じるがよくあります。そういった空気、つまり『雰囲気』は敏感にわかるのもので、その予感的中していることがほとんどです。このような、ムードとか雰囲気とか場の空気といった類のものを、AIや親和型ロボットが測定・評価する研究開発も進められているらしいですが、一般的には数値での計測は難しいものです。しかし、この『雰囲気』を積極的に感じ取ろうとする意識や敏感に感じられる嗅覚こそが、教師に必要な資質・能力の一つと言っても過言ではないと考えます。

生徒が、学校が楽しいとか、居心地がいいと思うのは、『雰囲気』がいいからです。とにかく雰囲気の良い学校・学年・学級をめざしたいものです。では、一口に『雰囲気』といっても、具体的に何を指すのでしょうか。

新潟市では、目指す学校教育の重点目標達成の基盤として、「支持的風土」の醸成を掲げています。まさしく、学級・学年・学校等での集団としての「支持的風土」こそ、『雰囲気』そのものの正体かもしれません。そして、「支持的風土」づくりに向かうための筋道として、『傾聴・受容』『支援』『自律』の重要性を挙げています。

つまり、「支持的風土」の土台となるのが、一人一人の生徒とのコミュニケーションだということです。

先生方には、教育相談等設定されている機会以外にも、日常の会話やオレンジノートを通じて、生徒とのコミュニケーションを大切にいただいていることを、たいへんありがたく感じています。先日、ある教育関係の広報誌で、小学校校長を歴任し、新潟県スクールカウンセラー、新潟教育研究所の教育アドバイザー、教育相談専門の木澤弘先生が、教職員向けに次のような内容を記しています。参考のために。

